

トビイロウンカの被害解析

高野光之丞*・相馬 茂**・石川元一*・村上正雄*

埼玉県下におけるトビイロウンカの発生記録は昭和31年の県東南部の発生が最初となつている(高野ら1956)。その後多少の発生はあつても被害のない状態が続いた。昭和35年に異常発生があり、その発生地域は前回に比し著しく広範囲となり、前回発生地域にとどまらず、北足立地区にも発生が及んだ。したがつて今後もし異常発生があるとすれば、その発生地域はさらに拡大するものと思われる。トビイロウンカの被害解析についてはすでに多くの成績があるが、関東地方の北限と思われる本県の場合の被害状況を明らかにするため現地実態調査を行なつたので、その結果を報告する。

1. 調査の方法

供試材料は草加市弁天町の一般農家が栽培した圃場で、9月8日被害をうけた金南風と9月9日被害をうけた農林25号について調査を行なつた。10月13日被害部すなわち初発生部を中心とした部分と、同一圃場で被害をうけなかつた部分をそれぞれ 3.3 m² づつ刈取り、10月19日脱穀後、精籾重、精粗 1 l 重および藁重を、また12月14日籾摺を行ない、粗玄米重、精玄米重、屑米重および精玄米、屑米の 1 l 重ならびに 1000 粒重について測定した。

2. 調査成績

調査の結果は別表のとおりである。金南風は一般的に

農林25号に比して被害が激甚であつた。最も顕著に認められた点は、藁重、精粗重、粗玄米重、および屑米重の減少である。しかし被害区の精玄米重の減少にもかかわらず、これに対する屑米重の割合は無被害のものに比して増加していた。また農林25号についてみると、金南風とほぼ同様な影響のあることが認められるが、これと異なることは、藁重、精粗重、粗玄米重、精玄米重の減少が少ないことと、屑米重量が無被害よりも増加していることである。

このように金南風と農林25号によつて被害の様相に差異を生じたことは、被害の出現時期が歴日においてほぼ同一であつたのに加かわらず、稲の生育ステージからみると、金南風は晩生稲で出穂後間もない乳熟期ごろであつたのに対して、農林25号は中生稲で、すでに糊熟期となつていたためと考察される。

また精玄米、屑米の 1000 粒重および、1 l 重についてみると、金南風、農林25号おともに無被害のものに比較して軽くなつており、特に、金南風の方がその差が大きくなつている。

上述のようにトビイロウンカの被害は稲の登熟障害に起因するため、その被害の多少は被害出現時における稲の生育ステージによつて支配されると推論される。

(* 埼玉県農業試験場 ** 埼玉県北足立病害虫防除所)

調 査 成 績

品 種 名	区 別	被害発生時期	3.3m ² あたり		精粗 1 l 重	3.3 m ² あたり				1000粒重		1 l 重	
			藁重	精粗重		粗玄米重	精玄米重	屑米重	屑米歩合	精玄米	屑米	精玄米	屑米
農林 25 号	被害区	9. 9	(g) 1,780	(g) 1,203	(g) 450.0	(g) 938	(g) 594	(g) 344	(%) 36.7	(g) 19.8	(g) 12.7	(g) 807.9	(g) 705.8
	無被害区	—	5,850	1,841	541.6	1,288	956	332	25.6	20.9	14.8	809.3	763.4
	比 率	—	30.45	65.38	83.08	72.86	62.13	103.61	143.36	94.71	85.84	99.82	92.46
金 南 風	被害区	9. 8	1,070	446	325.0	286	65	221	77.3	18.1	10.6	795.7	650.8
	無被害区	—	6,430	2,058	518.7	1,441	1,056	385	26.7	20.1	15.3	821.2	784.3
	比 率	—	16.62	21.69	62.66	19.85	6.16	58.40	289.51	93.05	69.21	96.90	82.97